

文久元年、鉱石の発見以来鉱山と共に発展してきた小坂町。閉山の不遇の時代を経て、サミットを契機に環境に活路を見出すまちづくりを展開、町を応援する気運の高まりは、「未来創生基金」を生み、町発展の試金石として取組みが行われています。

住民等参加型の新たな財源確保策「未来創生基金」(小坂町)

文化も経済も

小坂鉱山と共に発展

本県の東北端に位置し、県の北東部には国立公園十和田湖が神秘的な姿を横たえている小坂町。

町では1861年(文久元年)に鉱石が発見されて以来文化も経済も小坂鉱山と共に発展してきました。最盛期の大正時代には日本三大銅山一つに数えられるほど露大掘りの鉱山として有名でありました。

昭和60年頃まで4つの鉱

山を有していましたが、鉱量の枯渇と急激な田高により閉山。現在、近隣鉱山の鉱石など複雑鉱を処理する世界屈指の技術を持つ精錬所が稼働しています。

サミットを契機に環境に活路を見出すまちづくり

平成9年10月鉱業の新たな活路を見いだすため町において世界鉱山サミットが開催されました。サミットでは小坂宣言が採択され、環境に配慮した循環型社会を構築していく文言が盛り込まれました。

これを契機に環境に活路を見いだすまちづくりを掲げ、町総合計画「小坂エコライフ・プラン21」、町環境基本計画を策定、町の望ましい環境の実現のために各種の環境施策を町民と行政が協働のもと展開してきました。



まちづくりに対して町民の意見を直接反映させることを目的に設置された「小坂町まちづくり委員会」



小坂町を会場に世界鉱山サミットを開催



近年、この環境を柱とする施策を評価し、賛同する町民が増えはじめ、町を応援する気運が高まってきました。

キッカケは町の応援団 泰阜村・ニセコ町に続く

昨年の春、町の応援団のひとりである観光関係者から、町の観光に役立ててほしいと町に対し寄付を頂きました。その取り扱い、使い道について思案していたところ、その6月に長野県の泰阜村が「ふるさと」思いやり基金条例」を制定、続いて北海道「ニセコ町」がふるさとづくり寄付条例」



定めたことを受け、そこで町では、まちづくり施策に賛同してくれる方から広く寄付金を募り、それを基金として積み立て、特色のある事業等に活用する条例の制定に向け取り組んだのでした。

住民等参加型の 新たな取組みとして

この条例は、小坂町総合計画の基本理念である「誇れるまち」「強いまち」そして「やさしいまち」づくりを具現化する事業を推進するため、対象事業を 森林資源の維持保全及び整備に関する事業 環境の保全及び景観の維持再生に関する事業 循環型社会の構築に関する事業 自然エネルギー及び省エネルギー



ギ一設備の整備に関する事業 住民自治の醸成及びコミュニケーションの推進に関する事業 観光資源の維持及び整備に関する事業の、以上6つの事業を定めております。小坂町に関心を持った方、ふるさとでの発展を願う町内外の人に町政に関わってもらうことを狙いとした、住民等参加型の新たな取組みとして条例を策定したのでした。この基金条例の名称を町職員に募ったところ、小坂町が「んばれ基金・きらり輝け小坂町基金・小坂21世紀基金・あなたの寄付でまちづくり基金」などたくさんの方の応募の中から、「小坂町未来創生基金条例」が選ばれました。

全国で4番目となる 「未来創生基金条例」

平成17年3月定例議会に上程された「小坂町未来創生基金条例」制定案は可決となり、岡山県新庄村の「協働のふる里づくり基金条例」に次いで、全国で4番目の制定となりました。

これを受けて町では今後この「未来創生基金」の趣旨をアピールしながら金額、個人、団体を問わず広く寄付を募っていく方針で、広報に掲載するほか、町ホームページなども活用しながら積極的にPRしていくとし、また、3千人を超える会員がいる首都圏のふるさと小坂会にも、二年に一回の総会の年に当たる今年、ふるさと小坂のために絶大なご支援をお願いしていくこととしています。

投資するに値する自治体として小坂町に注目

小坂町は、平成15年末に単独立町を表明しました。多くの住民らで組織された「小坂町まちづくり委員会」を立上げ、地域住民と行政が



協働して策定に当たった自立計画がこの程取りまとめられました。

現在44の自治会に対して一つ一つ回って自立計画を説明して歩いているところで、この基金についても協力をお願いしています。

各自治体の自立計画の多くは、歳出抑制に主眼が置かれ、夢や希望をかなえるための行政運営に必要な、財源確保策まで踏み込めていないのが現状です。

投資するに値する自治体として今後真価が問われる、小坂町の取組みに注目したいところです。